平面製図法における形態因子
——胴部原型のガイドラインとなる近似体表面展開図——

県立新潟女短大　○平沢和子　　大妻女子大　磯田　浩

目的　平面製図法により、補正を前提としない胴部原型の製作を目的とする。
平面製図において必要不可決な計測項目及び計測値の適用を検討するため、平面製図法による近似体表面展開図を求めることを試みた。この展開図は、動作・材料のちがい・感覚的なバランス等のためのゆとり量を切り離し、形態因子に起因する構造線の変化をあらわしたものである。したがって、適合性を客観的に検証することや胴部の体型の実体を観察することができ、目的別に意図したゆとり量を付与することが可能である。
方法　体表面展開図の垂直線・水平線をそれぞれ前後正中線・胸囲線に合わせて描くことのできる計測項目を設定し、布目を通した場合の近似体表面展開図を得た。但し、胸囲線から胴囲線にかけては体表に密着させず垂直におろしたいわゆるボックス型の展開図である。適合性の確認は不織布を用いて右半身について行い、被験者に印した頸付根線・肩線・袖ぐり線・胸囲線・胴囲線の合致を調べた。試着のためのゆとり量として袖ぐりに腕付根囲の4％を加えた。測定方法はMartin方式に従ったが、頸付根線を描くため、試作したネックゲージ[1]を用いた。被験者は青年女子（18～21才）、中年女子（35～45才）、老年女子（65～75才）各50名，合計150名であり、実験期間は昭和58年5月～60年6月である。
結果　すべての計測項目の体表実長を満たすこの展開図は、胴部の形態の個体差や加齢による変化を表わすことができ、胴部原型のガイドラインとなり得ると考えた。これを描くための計測は、前胴部20項目・後胴部26項目であり、描き方は実測値を用いて段階別に図示し報告する。

1)　平沢和子：家政誌31，5，1980.